第１部
第一次世界大戦とその影響

第1章

「Bellification（戦争化）」
世界大戦時代（及びそれ以降）の戦争、軍、社会、知識

フランク・ライヒヘルツァー

1. 序論[1]

「世界大戦の経験は、我々が描く戦争の枠組み――純粋な軍事問題及びビジネスとしての戦争――が余りに狭いものであったことを示した。我々は今では、戦争を総体として研究せねばならないことを理解している。これはすなわち、社会全体の問題としての戦争を意味する」[2]。これは、オスカー・リッター・フォン・ニーダーマイヤーの 1939 年の著書『Wehrpolitik』（国防政策）中、「Wehr und Wissenschaft」（国防と科学／学術）と題した章からの引用である。ニーダーマイヤーは 1930 年代に大佐の階級のまま一時休暇を取得し、ベルリン大学国防政策研究所（Institut für Wehrpolitik）の教授兼所長を務めた。ニーダーマイヤーは、自らの言葉の意味を理解していた。軍人にして研究者としての彼の活動の舞台は、キャリア初期から軍と学術界の狭間にあった[3]。

ニーダーマイヤーの言葉を分析すると、「高度近代」[4]における戦争の一般的特性に関する印象を得られる。すなわち、a）戦争を主に軍事問題として理解するのは余りに単純である。b）現代の戦争は軍事組織同士の戦闘ではなく、社会と社会の衝突とみなすべきである。c）これにより軍と市民社会の多数の要素が交

---

[1] 本稿は拙著（Reichherzer）、*‘Alles ist Front!’* での研究に基づいている。同書では、本稿で触れたテーマに関する詳細な文献や原典資料を紹介している。本稿は、ドイツ連邦軍軍事史・社会科学研究所で近年結成された研究グループ「知識、軍、武力、暴力」の研究成果の一部でもある。

[2] Niedermayer: *Wehrpolitik*, p. 137.

[3] ニーダーマイヤーの生涯はSeidt: *Berlin Kabul Moskau*に詳しい。第一次大戦については Seidt: *From Palestine to Caucasus*を参照。ニーダーマイヤーの生涯とナチス体制下の活動、ナチスのイデオロギーに対する彼の曖昧な態度については、Jahr: *Generalmajor Oskar Ritter von Niedermayer* を参照。

[4] 「高度近代」は、1880年代から1970年代の時期の解明に努めるものである。この時間的枠組みについては、Scott: *Seeing Like a State*、Herbert: *Europe in High Modernity*を参照。批判と差別化についてはRaphael: *Ordnungsmuster der ‘Hochmoderne’*を参照。

差する領域が生まれる。d）戦争を計画・組織・実行さらには想像する上での知識の役割及び知識の流れを加えられるだろう、というものである。

ニーダーマイヤーの著書における考察と主張は――第一次世界大戦開戦後20年以上がたった以上――率直ではあったが画期的ではなかった。同じような意見や言い回しを、世界の多くの論文、書籍、政府や軍の覚書に見ることができる。しかしながら、第一次大戦前であれば、開戦という多少なりとも政治的な決定が下された後で、戦争の準備及び実行における軍の役割を疑問視することは――わけてもドイツでは――軍事機構以外にも強い憤りを引き起こしただろう[5]。ニーダーマイヤーの主張や同様の意見は、軍による戦争の独占に疑念を呈すことにほかならなかったからだ。

ニーダーマイヤーの引用は、次の疑問につながる。すなわち、19世紀末頃から1940年代の時期に、戦争と軍と社会の結び付きに対する人々の考え方がどう変わったのか。戦争と戦争状態に関する知識はどのような役割を果たし、それら全てが何を意味するのか。本稿では、これらの疑問への回答を試みる。したがってここでは、二つの次元で議論を展開する。

第一は実証的な次元である。第一次大戦中に、社会は総力戦にとって一層不可欠な存在になった。戦争はほぼ全ての社会制度に影響を与えた。こうした推移が、戦争と軍と社会の三者の力関係に変化をもたらした。この複雑な関係性の中心を占めるのは、多種多様な「戦争に関する知識」[6]である。したがって、本稿の関心の焦点は学術分野、特に戦間期のドイツにおける「Wehrwissenschaften」（「戦争研究」／「国防研究」）という概念の発達と実践、及びその制度化にある。

第二に、分析的な次元に移る。学術的な知識とその知識の戦争との関連性をめぐる疑問は、視野を広げるものである。そのため、世界大戦の時代に固有の

---

[5] 七年戦争でフリードリヒ二世（大王）が採った戦略をめぐる、参謀本部戦史部と歴史学者ハンス・デルブリュックの論争が一例である。参謀本部の見解を裏付ける一つの主張は、デルブリュックは軍務経験が少ない民間人であるというものだった。Lange: *Hans Delbrück und der ‚Strategiestreit'*、*Bucholz: Hans Delbrück and the German Military Establishment*を参照。

[6] ここでは広義の「知識」と理解され、「技術的」「実利的」「科学的」「職人的」な知識及び「暗黙」知を指す。知識の分野に関する優れた入門書にBurke: *What is the History of Knowledge?*がある。

特徴によって、「Bellification」【訳注：この言葉の訳語については後述】[7] の概略を描くことが可能になる。この言葉は、ラテン語で戦争を意味する「bellum」に由来する。分析の手段としての Bellification によって、社会が戦争に向かっていく過程や、戦争をめぐる想像が社会に及ぼす影響の大きさについて、考察することができる。

最初に示した上記の概要を念頭に置いて、本稿ではこれを次の 3 点から掘り下げていく。

1. 第一部では、想定される「未来の戦争」に着目し、第一次大戦中、特に第一次大戦後に戦争に関する考え方がどのように、そしてなぜ変化したか、及びその変化がどのような結果を生んだかという問いに答えていく。
2. 第二部では、戦争状態の「全体性」に関する知識が果たした役割と、この「全体性」が学術界に与えた影響、及び「全体的」アプローチとしてのドイツにおける「戦争研究」の概念について説明する。
3. 加えて最後の短い部分では、20 世紀の歴史の研究と考察に役立つ、ヒューリスティックで分析的な手段としての「Bellification」の概念を紹介する。

2. 変化するパラダイム、世界大戦時代の戦争の枠組み

同時代の人々は、第一次大戦をそれ以前のいかなる戦争とも異なるものとして認識した。第一次大戦は、経験と期待の関係性を作り変えた[8]。「第一次大戦とい

---

[7] この言葉はテュービンゲン大学の研究所（SFB 437）で考案され、筆者自身の実証的研究を通じて発展し概念化された。Reichherzer: *'Alles ist Front!'*、特にpp. 413-426を参照。同様の理解については、Rüdiger Bergien 及びMichael Geyerの著作を参照のこと。例えばBergien: *Bellizistische Republik*、Geyer: *The Militarization of Europe*、Geyer: *Der zur Organisation erhobene Burgfriedenな*ど。テュービンゲン研究所の研究成果の概要については、Beyrau/ Hochgenschwender/Langewiesche (Ed.): *Formen des Kriegesを*参照。

[8] 一時性と歴史（史実性）、及び過去・現在・未来の相互関連性に関するReinhart Koselleckの研究、特に「期待の空間」（Erfahrungsräume）と「期待の地平」（Erwartungshorizonte）という概念は深遠な枠組みを与えてくれる。例えばKoselleck: *'Space of Expectation' and 'Horizons of Expectation'* を参照。現代ヨーロッパにおける戦争と経験をさらに概念化したものとして、Buschmann/Carl (Ed.): Die Erfahrung des Kriegesを参照。

う革命（以下略）」[9]や「大戦は、時代遅れな姿勢の徹底的な掃討であった（以下略）」[10]などの表現を、そこかしこに見つけることができた。確かに、歴史上のどの戦争においてもこうした表現や解釈を容易に見出せるだろう。しかしながら、1914～1918年の大戦争（グレート・ウォー）の場合、同時代の人々は極めて深い断絶を感じ、新たに「想像された現実」に基づき行動した。この現実像が1970年代までおおむね変わらずに続いた。したがって、第一次大戦は――科学哲学者であるトーマス・S・クーンの言葉を借りれば――根本的な「パラダイムシフト」であり、あるいはルドヴィック・フレック（訳注：医師にして生物学者）の同じく有名な言葉によれば「思考様式」[11]の変化を意味した。

ここでは、長期的に続く二つのプロセスが重要な役割を果たした。一つは、工業化、機械化、高度な技術などのキーワードを通じて明らかになっている。もう一つは大量動員である。両プロセスは18世紀に始まり、19世紀最後の20～30年間に不可欠な存在となった。第一次大戦では、両プロセスの破壊的な力が合わさった。工業化・技術の普及、大量動員、通信、ロジスティクスが並行的に発展した。1930年代に作られた「総力戦」という耳に残る言い回しは、当時の議論の中でこれを要約したものであり、「全面化」[12]のプロセスを明確に示している。

さらに緻密に検討すると、戦争のヴィジョンとそこから生じる結果が、広く受け入れられた疑問の余地のない二つの信念に基づくものだったことが明らかになる。第一に、戦争は避け難く永遠になくならないものであり、世の中には戦争があるかないかという二つの状態しかない、という信念である。そして、戦争はいかなる限界もない事象である、という信念である。この二つの中心的な信念が、新たに登場したかに見える戦争の必要性と並んで、軍事的、政治的な計画の立

9　Benary: *Die Revolution des Krieges*, p. 757.

10　Cochenhausen: *Wehrkunde als Lehrfach*, p. 263.

11　Kuhn: *The Structure of Scientific Revolutions*、*Fleck: Genesis and Development of a Scientific Fact*を参照。

12　「総力戦」の歴史化については、Förster/Nagler (Ed.): *On the Road to Total War*、Boemeke/Chickering/Förster(Ed.): *Anticipating Total War*、Chickering/Förster, (Ed.): *Great War, Total War*、Chickering/Förster (Ed.): *The Shadows of Total War*、Chickering/Förster/Greiner (Ed.): *A World at Total War*を参照。

案及び社会の「総動員」におけるほぼ自明の前提となった[13]。

・戦争は避け難い／永遠になくならない

実際、戦争は避け難いという信念は目新しいものではなかった。かつて戦争は、神による自然と人類の歴史への介入とみなされた。にもかかわらず、19 世紀末及び第一次大戦中には、戦争は次第に――特に右派陣営において――闘争を重視したダーウィン理論の解釈に基づく文脈で理解されるようになった。「生存競争」が生物の基本的な概念となり、これが社会組織にも適用された[14]。それゆえに、戦争は人類の生活において無視できない不可欠な要素であるかのような様相を呈していた。ある人気作家が書いたように「血だけが（中略）世界の歴史の歯車を動かす」[15]のだ。これに関連して、「良好な」社会秩序とは、戦争の種類と必要性を踏まえて築かれた社会になるだろう。したがって、戦争は政治的手段としての特徴を失い、国家社会主義イデオロギーの名における終わりなき「生存競争」になったのだ。近い将来に戦争は避け難いという展望により、戦争に備えた社会の組織化が正当化され、ある種の急進主義をあおった。

・限界のない戦争

同時代の人々から見て、戦争は限界のない「全面的な」事象になった。こうした理解を、多くの分野で観察することができる。ほんの一例をあげると、戦時と平時、「前線」と「本土」（後者は「国内戦線【訳注：銃後】」となった）、軍人と文民、軍指導部と政治指導部、技術やインフラの軍事利用と民生利用の境界がなくなり、いわゆる「戦争の必要性」によって倫理的価値観・基準が疑問視され崩壊した[16]。これは、軍事分野と民生分野の境界が第一次大戦中に消失したことを示すものである。戦間期に、未来の戦争をめぐる見通しによってこうした境界が一掃された。多くの同時代人の目から見て、戦争はもはや軍と軍事組織に限定

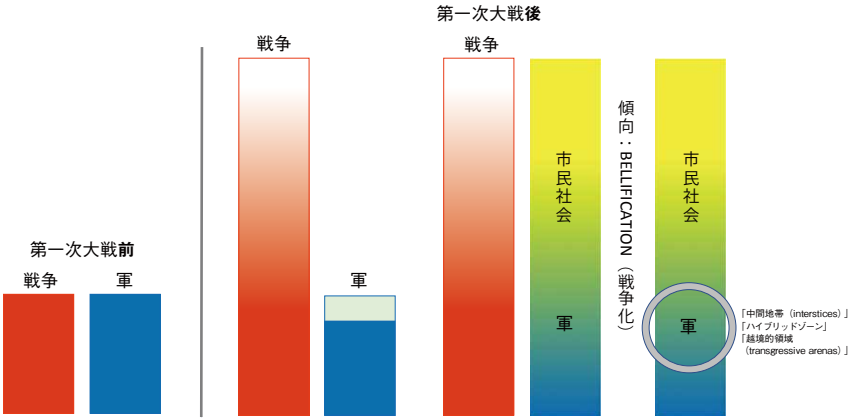
---

[13] これについては、戦争詩人エルンスト・ユンガー（Jünger, Jünger）による、*Die totale Mobilmachung* を参照。
[14] この理論の隠喩的な使用についてはWeingart: *'Struggle for Existence'*を参照。
[15] Soldan: *Mensch und die Schlacht der Zukunft*, p. 104.
[16] Reichherzer: 'Alles ist Front!', pp. 43-63を参照。

されたものではなくなった[17]。むしろ戦争は今や、社会全体の問題となり、戦争の「民生的な」側面が注目を集めていた。したがって、戦争は「全体的な」現象として概念化する必要があった。この解釈においても、戦争が何より重要とされ社会という組織の最上位カテゴリーに位置付けられた。すなわち、あらゆる行為、主体、客体は、未来の戦争でそれが必要かどうかという視点から、評価されねばならなかった。この観点に基づくと、戦争が（人間を含む）万物の尺度になったのだ。

このような展望に基づく戦争体験の解釈から、a）文民による戦争の流用、b）戦争の脱軍事化、という二つの異なる絡み合ったプロセスが登場した。

図 1：戦争－軍－社会の関係性



19 世紀の歴史に基づく簡略化した概念図（図 1）によると、第一次大戦前は軍と戦争は一体であった。戦争と戦争状態への対応は、純粋に軍及び軍事組織の専権事項であった。第一次大戦中に――前述のように――戦争は次第に限定

[17] 数多くの意見の一つとしてLinnebach: *Wehrwissenschaften. Begriff und System*を参照。この傾向への批判としてはAmbrosius: *Zur Totalität des Zukunftskrieges*, pp. 187-188を参照。

的ではなくなった。兵士、戦車、大砲、艦艇、航空機、トラックなどの軍事アセットが、戦争遂行の必需品とみなされた。国家の持てる全ての能力――総合的な「戦闘能力（potential de guerre）」――を考慮に入れる必要があった。したがって、戦争と軍事組織の間に大きな隔たりが生じた。市民社会の擁護者が、この隔たりを埋めようとした。彼らはこの目標に従って、戦争の民生的な側面という新たに認識された要因に注目した。民生領域に含まれる多くの分野の主体は、戦争は限界のない事象であるという固有の解釈から生まれた総力戦に伴う問題を、科学的、学術的な形で特定し解決しようと試みた。戦争状態に関する包括的な知識が、想定された総力戦に関わる問題を解決する上で重要な要因となった[18]。これらの問題は、社会の「完全な」組織化、戦争に向けた経済体制の準備、地域研究、戦争のための地形・都市空間の整理など多岐にわたるだろう。この点で、一方では、非軍事主体による戦争の流用や彼らの専門知識が顕在化している。他方で、このプロセスを「戦争の脱軍事化」と表現することもできる。「戦争という旧来の伝統的な用語」（Kriegsbegriff）が、「国防という新たな政治用語」[19]（Wehrbegriff）に置き換えられたのだ。軍は、戦争に関わるあらゆる問題において最終的な能力を失った。加えて、どこで軍の任務が終わり市民社会の責務がどこから始まるか、明白な境界がなくなった[20]。ここに、中間地帯――軍民の複合的な環境にして、知識の伝達・転換が行われる領域――が出現したのだ。

このような展開が、ヨーロッパと北アメリカ全体、それにおそらくは日本でも生起した[21]。ドイツの場合は戦間期に、ヴェルサイユ条約が定める軍備制限や、1920 年代後半に見られた政治・文化・芸術界の戦争賛美の文脈の中で、「文民による」実質的な関与が拡大した。さらに、戦間期に見られた、攻撃的な男らしさ

---

[18] 体系的なものとしてSzöllösi-Janze: *Wissensgesellschaft in Deutschland*が挙げられる。Ash: *Wissenschaft – Krieg – Modernität*も参照。ナチス政権についてはFlachowsky, Hachtmann, Schmaltz (Ed.): *Ressourcenmobilisierung*を参照。

[19] Niedermayer: *Wehrgeographie*, p. 7.

[20] 第一次大戦後半に帝国陸軍参謀本部第一主計総監を務めたエーリヒ・ルーデンドルフの言葉である。Ludendorff: *Kriegserinnerungen*, p. 1を参照。

[21] 日本に関してはTomohide: *Militarismus des Zivilen in Japan 1937–1940*、英国に関してはEdgerton: *Warfare State*を参照。米国では、第二次大戦直前さらに特に冷戦期にこのプロセスが強まった。大量の文献及び時代間の橋渡しについては、Lowen: *Creating the Cold War University*を参照。

やナショナリズム、ナチズムの台頭も忘れてはならない[22]。

ドイツの軍備削減により、陸軍の増強や軍事組織への専門家の招聘を通じて、「総力」戦に関わる問題を解決する余地はなくなった。実際にはその正反対のことが起きた。確かにヴェルサイユ条約は、軍以外――特に大学及び民間団体――での軍事関連活動を禁止した（同条約第 177 条）。しかしながら、軍当局と文民当局、さらには民間機関でさえ「民生」活動を容易に偽装することができた。軍指導部は、文民行政職員、民間組織及び大学との協力を余儀なくされた。ヴェルサイユ条約により、連合国軍は、軍事計画の中枢を担う組織で戦争遂行の要として知られた、プロイセン参謀本部（ドイツ参謀本部）を解体した。そのため軍民協力が一層必要になり、余り疑問視されることもなくなった[23]。したがって、外部からの強制により、軍は戦争の独占を諦めなければならなかった。「戦争の脱軍事化」を背景として、軍事計画組織は、市民社会の領域内で活動の実施と管理を行い、様々な活動を軍事組織の外に導こうと努めた。ここにおいて軍は、自身で戦争を管理できると主張する自信満々の文民主体と対立した[24]。競争と協力が平行して進んだ。軍民の関係性が永続的なプロセスのなかで協議された[25]。他方で、戦間期のドイツでは多種多様な軍産複合体が生まれ、これらは、唯一無二で最上位の計画立案組織としての純粋な参謀本部と比べて、「総力戦」のイメージにはるかに適合するものであった。

3. ‘Wehrwissenschaften’――「総力戦」が学術界に与えた影響

戦争体験がドイツの科学と学術界に与えた影響や、第一次大戦後に知識が果たした役割、さらには知識の管理について研究すると、ドイツで誕生した「Wehrwissenschaften」【訳注：この言葉の訳語については後述】と呼ばれる新たな曖昧な概念に出会うだろう。「Wehrwissenschaften」は流行の新語だった。こ

22　詳細はReichherzer: *‘Alles ist Front!’*, pp. 96-127を参照。
23　Bergien: *Bellizistische Republik*を参照。
24　Dülffer Vom *Bündnispartner zum Erfüllungsgehilfen*, pp. 291-292; Reichherzer *‘Alles ist Front!’*, pp. 161-170.
25　軍民関係を扱った示唆に富む研究は、今もやはりHuntington: *The Soldier and the State*である。

の表現は、1920 年代後半のドイツの前述した政治的、社会文化的な雰囲気の中で登場した。ベルリンの軍中央図書館（Heeresbücherei）の司書が、この言葉を作り出した。司書らは、戦争の民生的な側面を扱った新たな文献を分類する必要に迫られたのだ。そこで包括的な用語として、「Wehrwissenschaften」を使用した。したがって実用的な理由から作られた言葉であったが、瞬く間に広く普及した。この言葉は、戦争の民生的な側面に関わる全ての活動、又は軍事、科学、学術、政治、経済及び他のあらゆる分野の間に位置する領域――簡単に言えば社会全体――の全ての活動の主眼となることができた[26]。

多くの国でこれと似た現象が見られるものの、「Wehrwissenschaften」は翻訳しにくい言葉である。この言葉は、戦間期のドイツに特有の事情に由来する特別な意味を持っている。米国、英国、フランスの学術誌や新聞、論説には、「Wehrwissenschaften」に関連して、「戦争研究」、「戦争に関する（総合）科学」、「軍事研究」、「国防研究」、「軍備研究」、「戦争学」などその他多くの言葉が認められるものの、これらの訳語の中にちょうど当てはまるものはない。「Wehrwissenschaften」は、この概念のあらゆる意味を網羅した包括的な用語である。総合的な防衛策、軍備、短期間で平時から戦時に移行する可能性といった、ここで言及したすべての要素を統合することで、「Wehrwissenschaften」という概念が意味する印象が伝わる。以下では、これを広義の「戦争研究」と呼ぶことにする。

軍事、行政、学術の狭間で活動する多種多様な集団が、社会の異なる場所からこの概念を発展させた。戦争研究の推進者は、決して一貫性あるプログラムの策定や確立を行わなかった。学術界においても活発な議論と様々な表明を見ることができる[27]。とはいえ、メタレベルでは、これら全ての概念と表明にはいくつかの共通点があった。戦争研究とその推進者に共通する目的は、総力戦というイメージに沿って、来るべき戦争に向け社会を動員することにあった。学術、科学、人文、大学やその他の研究機関が、このプロジェクトの中核を担うべきであるとされた。情報社会と知識社会の出現を踏まえて、知識がこの種の動員の鍵となっ

---

[26] Reichherzer: *‘Alles ist Front!’*, pp. 140-141.
[27] 例えばReichherzer: *‘Alles ist Front!’*, pp. 140-189を参照。

たため、知識を創出し補強し普及させること――知識の流れ――が必須とみなされた。論文、体系的研究、論説、覚書やその他の多くの資料の検討を通じて、戦争研究の目的を形作る三つの主な要素が明らかになっている[28]。

・知識の流れと橋渡し

第一の目的は、知識の統合と橋渡しに向けた努力である。これは、限界のない戦争を経験したことへの直接的な反応であった。統合と橋渡しは、限界のない戦争を「Wehrwissenschaften」／「戦争研究」という包括的な言葉の下で扱うための手段だった。学術界では、古典的な学問分野同士だけではなく、政治、軍事、学術界、行政の間の統合も達成されねばならない。橋渡しを通じて、異なる分野、人々、社会制度の間に概念、アイデア、成果の流れを実現すべきである。言うまでもなく、戦争をめぐる相互に関連し合う数々の疑問が、これを促す動機となった[29]。

・知識に基づく政策的助言

第二の要素は、知識に基づく政策的助言と政策立案者の教育と表現できるだろう。この目的の背景として、第一次大戦前及び戦中のドイツ帝国の政治指導者には戦争の知識が不足していたことに加えて、他方で参謀本部・軍指導者の政治情勢に対する理解も不十分であったという認識がある。こうした文脈に基づき、戦争研究は常に、戦争に関する科学的知識を通じて意思決定プロセスに貢献すべきである。戦争に関する知識不足を克服するために、戦争研究の推進者らは、全ての政府高官が戦争と戦争状態に関わる基本知識を習得すべきであると主張した。戦争は至る所で起きることから、ほぼ全ての問題を、他の側面以上にまずは戦争の観点から分析する必要があると示唆された。したがって、例えば将来的に軍事利用される可能性がある全地形対応車への税制優遇措置、負傷者の輸送を可能にする客車の製造、地形や都市空間の「戦場（warscapes）」への改造な

---

[28] 詳しくはReichherzer: *‘Alles ist Front!’*, pp. 17-19を参照。

[29] 知識の循環に関する概念的アプローチはGugerli et al: *Zirkulationen*の*‘Nach Feierabend’*巻を参照。次のウェブサイトに随時追加される論文も参照。<https://historyofknowledge.net/category/circulation-of-knowledge/> (15.09.2021).

ど、絶えず戦争について検討することが必要であった[30]。

・知識によって社会に影響を与え、組織化する

第三の目的は、戦争の必要性に関わる社会全体の教育に取り組むことだった。多く見られる「戦争研究」の形は、社会のあらゆる場面に戦争に関する知識を導入するものである。1918 年の敗戦という衝撃的な体験が、常に戦争への備えが整った社会の確立を必要にしたように思われた。戦争研究の推進者は、この「心理的武装」の中に、国家の「物理的武装」に（ほぼ）匹敵する要因を見いだした。これは、純粋な「戦士の国」の創造を意味するわけではない。「Wehrwissenschaften」というプロジェクトは、より巧妙な方法を採用した。すなわち、総力戦の主体である現代の男性（さらには女性も）には二面性が必要とされた。現代人は平和な生活を送るだけでなく、戦車や潜水艦で究極の総力戦を戦う能力、あるいは工場や研究所、オフィスで戦う能力も備えるべきだというのだ[31]。

その結果として、戦争研究は数ある学問分野のなかの単なる一つの分野にとどまることはなかった。思想史を参考にした筆者の視点に基づくと、このドイツに特有の種類の戦争研究は、容易に区別できる学問分野という考え方を軸とする現代の標準的な学問体系のカテゴリーでは評価できないだろう。戦争研究は、古典的な意味の学問分野の壁を越えた包括的な概念として捉えられるべきである。今日の「環境」や「気候」がそうであるように、「戦争」は万人と万物に影響を及ぼした。もし戦争が「全面的」であれば、一つの学問分野では研究できないだろう。そのため戦争研究は、分野の垣根を越えた包括的なものになった。よって戦争研究は、戦争の研究という目的を中心に据えた――科学研究の観点から見ると――「学際的」又は「分野横断的」なアプローチとして理解されねばならない[32]。

---

[30] 例えばOestreich: *Vom Wesen der Wehrgeschichte*, p. 232、Frauenholz: *Wehrpolitik und Wehrwissen*, pp. 124-135を参照。特に戦場（Wehrlandschaft）という概念については、Wiepking-Jürgensmann: *Die Landschaftsfibel*の該当する章を参照。

[31] 例えばLinnebach: *s. v. Wehrwissenschaften*, p. 742、さらには.: Deutsche Gesellschaft für Wehrpolitik und Wehrwissenschaften (Ed.): *Kleine Wehrkunde*を参照。

[32] ここ以降に関してはReichherzer: *'Alles ist Front!'*, 特に pp. 377-382を参照。

これが、戦争研究の体系化にも反映されている。戦争研究は学問体系を越えた分野を発見することができる一方、体系自体を変更することはできなかった。ゆえに、学術の地平において四つの異なる形の戦争研究が存在した。

第一のステップは、戦争を扱った他分野の研究成果の収集、整理、普及を行う総合的な形の研究であった。こうした形の戦争研究は、大学のあらゆる部門やさらには一般市民から集めた戦争研究の主なトピックの概要を、幅広い読者に示すものだった。平時から戦時への切替えを行ったり、平時から戦争について考えたりすることは誰にとっても可能なはずである。このプロセスを通じて、戦争に関する知識を社会のあらゆる層に徐々に浸透させ、万人が活用できるようにすべきである。

学術界における第二の戦争の取り上げ方は、特に戦争に注目した伝統的な学問分野――歴史学や物理学など――に認められた。戦争に関心を抱く研究者は、戦争という角度から自身の専門分野を検討し、その分野に固有の知識を生み出すべきである。例えば地理学者は地政学的な問題に注意を払い、歴史学者は戦争史を扱った。ちなみに、歴史研究と地理研究は、戦争の全体像を描くための合理的な手段であった。なぜなら時間（歴史）と空間（地理）という区分を――同時代人の目から見て――統合的で「全面的な」形で活用することができたからである[33]。例えば1930年代と40年代の講座一覧やシラバスを見ると、化学者や生物学者は化学戦に関する知識を学んでいた。同様に、医学や法学を学ぶ学生も、化学戦を踏まえて化学物質に関する知識を考慮に入れる必要があった。

第三のステップは、戦争に関する統合的かつより集中的な研究であった。他分野の知識とデータを集めて体系化し、それを戦争に関わる総合的な理解と知識へと変えることが最も重視された[34]。1936年以降に出版されたWehrwissenschaften

---

[33] 歴史の例としてSchmitthenner: *Die Wehrkunde und ihr Lehrgebäude*、地理の例として Niedermayer: *Wehrgeographie*を参照。彼の研究所の具体的成果として、フランス、英国、ソ連、米国の様々な地図（Wehrgeographische Atlanten）として知識を可視化したことが挙げられる（1944／45年に出版）。この地図は多様な知識を体系化する手段として機能し、地図情報と視覚情報を一つにまとめた。

[34] 例えばNiedermayer: *Wehrgeographie*、Niedermayer: *Wehrpolitik*、Linnebach: *Wehrwissenschaften. Begriff und System*、Ewald: *Wehrwissenschaft*。

百科事典は、知識の体系化と普及というアプローチを促した[35]。この包括的な知識が、一種のフィードバックループを通じて戦争研究という分野の研究に影響を与えるに違いないとされた。統合され体系化された、集約的なこの知識を、他の学問分野や関連省庁、それ以外の政治機関や民間部門に普及させることが求められた。

1930 年代初めには、こうした考え方がドイツのほぼ全ての大学の教職員の任命に反映された。（ベルリンやハイデルベルクなどの）研究が盛んな一部の地域では、大学が、程度の差はあれ軍との緊密な関係性に基づき戦争研究を手掛ける特別機関を設置した[36]。加えて、戦争に関する知識普及の中心的なネットワークとしてドイツ国防政策・戦争研究協会（Deutsche Gesellschaft für Wehrpolitik und Wehrwissenschaften）が創設された[37]。同協会は、戦争研究という概念の明確化、研究成果の整理、政治家や軍指導者、大学講師・教授らへの助言の提供に努めた。大学の講座一覧や講義スケジュールを見ると、1930 年代に戦争を扱ったテーマが増えていることが分かる。軍、学術界、科学、産業、行政、学生団体などの分野の狭間で活動する人々が、戦争研究を精力的に推し進めた。このような軍民の「ハイブリッド人材」または「仲介役」が、学術界、軍、行政、社会のその他の分野の狭間となる領域で――文字通り――通訳の役目を果たした。

4. 軍事化を越えて ―― Bellification は 20 世紀の歴史分析の特徴なのか

戦間期における「Wehrwissenschaften（戦争研究）」と呼ばれる概念の誕生は、限界のない大規模な産業化された戦争――「総力戦」――のイメージが、「戦争の総合研究」という概念を提唱する根拠となったことを示している。もし戦争が総力戦となるのであれば、それを社会全体の事業としなければならない。この文脈において、戦争研究は社会の「Bellification」と呼ばれるプロセスの、a）指標であり、b）手段でもあった。

---

35 Franke: *Handbuch der neuzeitlichen Wehrwissenschaften*.

36 例としてハイデルベルク大学やベルリン大学。

37 Kolmsee: *Die Rolle der Deutschen Gesellschaft für Wehrpolitik und Wehrwissenschaften*、Reichherzer: *'Alles ist Front!'*, pp. 233-253を参照。

現代の考え方の中で、戦争は集団的な信念体系の指導理念へと発展した。自由主義、共産主義、独裁主義、ファシズムなどの世界観の違いにかかわらず、戦争は、社会のほぼあらゆる領域において、秩序に関する有力な概念として過剰な意味をまとった。特に20世紀の社会は、主に迫りくる戦争の脅威を軸として構築された。この時期に、戦争はあらゆる事物を評価する手段になった。全ての行為、主体、客体が（来るべき）戦争全般と関連付けて検討され評価された。

筆者の見解では、本稿で「Bellification」と呼ぶことを提案するこの傾向は、戦間期をピークとして1970年代以降の冷戦秩序の衰退に至るまでの、20世紀の本質的な特徴であった。なぜ「Bellification」なのか。Bellificationの分析的な枠組みは、「軍事化」や「軍国主義」と関連しているがこれと異なるものである。第一に、軍事化は、軍に加えて、軍事組織の価値観を市民社会及び社会制度へと拡大することに焦点を当てている。対して、このプロセスを進展させた軍自体は、中心ではなくロールモデルでもなかった。軍事化は、軍事分野以外における、戦争に向けた市民社会の自己強化であった。したがって第二に、「軍事化」は軍による市民社会の乗っ取りを指すことが多い。逆にBellificationは、市民社会の主体性と行為を分析の焦点に据える。第三に、戦争擁護派の視点から20世紀の歴史を振り返ると、市民社会は常に準備と総動員の状態にあり、文字通り瞬時に平時から戦時へと移行する態勢を整えていたことを確認できる。にもかかわらず、社会が画一化した軍事基地や「軍事国家」になることはなかった[38]。この種の「過度な軍事化」は不可能であり、決してそれが目標ではなく、市民動員の支持者の大半に加えて軍内部からさえも、過度な軍事化は機能しないとみなされていた。

それどころか状況は極めて複雑であり、Bellificationがこのことを浮き彫りにしている。ドイツの戦争詩人エルンスト・ユンガーは、「総動員」と題したエッセーで、Bellificationの本質をついに明らかにしてみせた。すなわち、「制御盤のあるボタンを押すだけで、平和な現代の生活の広く分岐したエネルギー網を戦争能力に振り向けざるを得なくなった」[39]。したがって、20世紀の「戦争」の決定的な瞬間はより捉えにくいものである。Bellificationという経験則に基づく枠組み

---

[38] Lasswell: *The Garrison State*を参照。
[39] Jünger: *Die totale Mobilmachung*, p. 14.

を通じて、市民社会の自己動員、自己認定、さらには自己強化を特定し分析することができ、この枠組みは、戦争の計画・遂行に関わるあらゆる問題が非軍事主体によって流用されたことを強調するものである。戦争は市民社会に「組み込まれ」た、あるいは「組み込まれる」べきものなのである。高層ビルの地下や地下鉄の駅に作られたシェルター、滑走路としても使える高速道路、公衆衛生問題、学校での軍事教練、軍需産業への技術移転、重要インフラの強靭性など、民生分野で戦争の可能性に配慮した事例は多く見受けられる――こうした例は、一目で分かる場合もあれば、分かりにくい場合もある。その結果として、戦時でも平時でもないハイブリッドな状況が生まれている。とはいえ、戦争という言葉をかぎ括弧に入れる必要がある。「戦争」とは流動的な現象だからだ。確かに「戦争」を武力紛争とみなすこともできるだろう。加えて、「戦争」とは概念であり、想像の産物であり、秩序の原則である。そして少なくとも「戦争」は、強力な隠喩である。Bellification は、これら全てを考慮に入れている。

したがって Bellification を用いた研究の責務は、戦争と平和、軍と市民社会の中間に位置する領域を検討することだと言えるだろう。これは、歴史学者と社会科学者にとっても有益かもしれない。Bellification は、社会における「戦争」の役割を探るための経験則に基づく分析手段として有効に機能する。Bellification という概念は、軍民関係を解明するものであり、「戦争」に加えて、「戦争」に対する志向の具体的形態と強度、そしてその支持者を利用するプロセスを、定量的・定性的に可視化するものである。さらに、Bellification は他のプロセスにも関連付けられる。

20 世紀の歴史に Bellification を適用することで、戦争の秩序が第一次大戦から 1970 年代に至る 20 世紀をどのように形作ったかが明らかになる。1960 年代後半から、わけても 1970 年代以降は特に、社会を編成する戦争の組織力が多くの角度から取り上げられた。そこから冷戦パラダイムの崩壊が始まり、1980 年代に消失した。もし 20 世紀最後の数十年間に、「戦争」という概念と隠喩から、「市場」へ、さらに現在ではそれ以外の何かへと、組織化の原則に転換が起きているとすれば、それはまた別の問題になるだろう。

参考文献と出典

Ambrosius, Hans-Heinrich: Zur Totalität des Zukunftskrieges, in: Wissen und Wehr 18 (1937), pp. 187-198.Ash: Wissenschaft – Krieg – Modernität.

Banse, Ewald: Wehrwissenschaft. Einführung in eine neue nationale Wissenschaft, Leipzig 1933.

Benary, Albert: Die Revolution des Krieges, in: Deutsche Wehr 36 (1933), 48, p. 757.

Bergien, Rüdiger: Die bellizistische Republik. Wehrkonsens und ‚Wehrhaftmachung' in Deutschland 1918-1933, München 2012.
Beyrau, Dietrich/Hochgeschwender, Michael/Langewiesche, Dieter (Ed.): Formen des Krieges. Von der Antike bis zur Gegenwart, Paderborn/a. 2007, pp. 163-195.

Boemeke, Manfred F./Chickering, Roger/Förster, Stig (Ed.): Anticipating Total War. The German and American Experiences, 1871-1914, Cambridge/a 1999.

Bucholz, Arden: Hans Delbrück and the German Military Establishment. War Images in Conflict, Iowa 1985.

Burke, Peter: What is the History of Knowledge?, Cambridge 2016.
Buschmann, Nikolaus/Carl, Horst (Ed.): Die Erfahrung des Krieges. Erfahrungsgeschichtliche Perspektiven von der Französischen Revolution bis zum Zweiten Weltkrieg, Paderborn/a. 2001.
Chickering, Roger/Förster, Stig/Greiner, Bernd (Ed.): A World at Total War. Global Conflict and the Politics of Destruction, 1937-1945, Washington 2005.

Chickering, Roger/Förster, Stig (Ed.): The Shadows of Total War, Europe, East Asia, and the United States, 1919-1939, Cambridge 2003.

Chickering, Roger/Förster, Stig (Ed.): Great War, Total War. Combat and Mobilization on the Western Front, 1914-1918, New York 2000.

Cochenhausen, Friedrich von: Wehrkunde als Lehrfach, in: Die deutsche Schule 39 (1935), 6/7, pp. 262-264.

Deutsche Gesellschaft für Wehrpolitik und Wehrwissenschaften (Ed.): Kleine Wehrkunde, Bielefeld u. Leipzig 1934.

Dülffer, Jost: Vom Bündnispartner zum Erfüllungsgehilfen im totalen Krieg. Militär und Gesellschaft in Deutschland 1933-1945, in: Michalka, Wolfgang (Ed.): Der Zweite Weltkrieg. Analysen, Grundzüge, Forschungsbilanz, München/Zürich 1989, pp. 286-300.

Edgerton, David: Warfare State. Britain 1920-1970, Cambridge 2006.

Franke, Hermann, im Auftrage der Deutschen Gesellschaft für Wehrpolitik und Wehrwissenschaften (Ed.): Handbuch der neuzeitlichen Wehrwissenschaften, 4 Volumes, 1936-1939.

Frauenholz, Eugen von: Wehrpolitik und Wehrwissen, Leipzig 1935.

Flachowsky, Sören/Hachtmannm Rüdiger/Schmaltz, Floroian (Ed.): Ressourcenmobilisierung. Wissenschaftspolitik und Forschungspraxis im NS-Herrschaftssystem, Göttingen 2017.

Fleck, Ludwik: Genesis and Development of a Scientific Fact (transl. by Fred Bradley and Thaddeus J. Trenn; Thaddeus J. Trenn and Robert K. Merton (Ed.), "Foreword" by Thomas S. Kuhn) Chicago 1979. (original in German 1936)

Förster, Stig/Nagler, Jörg (Ed.): On the Road to Total War. The American Civil War and the German Wars of Unification. 1861-1871, New York 1997.

Geyer, Michael: The Militarization of Europe, 1914-1945, in: Gillis, John R. (Ed.): The Militarization of the Western World, New Brunswick 1989, pp. 65-102.

Geyer, Michael: Der zur Organisation erhobene Burgfrieden, in: Müller, Klaus-Jürgen/ Opitz, Eckardt (Ed.): Militär und Militarismus in der Weimarer Republik. Beiträge eines internationalen Symposiums an der Hochschule der Bundeswehr Hamburg am 5. und 6. Mai 1977, Düsseldorf 1978, pp. 15-100.

Herbert, Ulrich: Europe in High Modernity. Reflections on a Theory of the 20th Century, in: Journal of Modern European History 5 (2007), 1, pp. 5-21.
Huntington, Samuel P.: The Soldier and the State. The Theory and Politics of Civil-Military Relations, Cambridge, MA 1957.

Jahr, Christoph: Die ‘geistige Verbindung von Wehrmacht, Wissenschaft und Politik’. Wehrlehre und Heimatforschung an der Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin 1933-1945, in: Jahrbuch für Universitätsgeschichte 4 (2001), pp. 161-176.

Jahr, Christoph: Generalmajor Oskar Ritter von Niedermayer, in: Ueberschär, Gerd R. (Ed.): Hitlers militärische Elite, Bd.1 Von den Anfängen des Regimes bis Kriegsbeginn, Darmstadt 1998, pp. 178-184.

Jünger, Ernst: Die totale Mobilmachung, in: Jünger, Ernst (Ed.): Krieg und Krieger, Berlin 1930, pp. 9-30. (As well with changes in: Jünger, Ernst: Sämtliche Werke, Zweite Abteilung, Essays I, Bd. 7, Stuttgart 1980, pp. 119-142.)

Kolmsee, Peter: Die Rolle und Funktion der Deutschen Gesellschaft für Wehrpolitik und Wehrwissenschaften bei der Vorbereitung des Zweiten Weltkrieges durch das faschistische Deutschland. Diss., Leipzig 1966.

Koselleck, Reinhart: 'Space of Expectation' and 'Horizons of Expectation' , in: Futures Past: On the Semantics of Historical Time, New York 2004, pp. 255-276. (original German 1976).
Kuhn, Thomas S.: The Structure of Scientific Revolutions, Chicago 1962.

Lange, Sven: Hans Delbrück und der ›Strategiestreit‹. Kriegsführung und Kriegsgeschichte in der Kontroverse 1879-1914, Freiburg i. Br. 1995.

Lasswell, Harold D.: The Garrison State, in: The American Journal of Sociology 46 (1941), pp. 455-468.

Linnebach, Karl (im Auftrage der Deutschen Gesellschaft für Wehrpolitik und Wehrwissenschaften): Die Wehrwissenschaften. Ihr Begriff und ihr System, Berlin 1939.

Linnebach:, Karl: Wehrwissenschaften. Begriff und System, Berlin 1939.

Linnebach, Karl: Wehrwissenschaften, in: Franke, Hermann, im Auftrage der Deutschen Gesellschaft für Wehrpolitik und Wehrwissenschaften (Ed.): Handbuch der neuzeitlichen Wehrwissenschaften, Vol. 1 Wehrpolitik und Kriegsführung, Berlin u. Leipzig 1936, pp. 741-744.
Lowen, Rebecca S.: Creating the Cold War University. The Transformation of Stanford, Berkeley 1997.

Ludendorff, Erich: Meine Kriegserinnerungen, 1914-1918. Mit zahlreichen Skizzen und Plänen, Berlin 1919.

Niedermayer, Oskar Ritter von: Wehrgeographie, Berlin 1942.

Niedermayer, Oskar Ritter von: Wehrpolitik. Eine Einführung und Begriffsbestimmung (Wehr und Wissenschaft, Bd. 4), Leipzig 1939.

Oestreich, Gerhard: Vom Wesen der Wehrgeschichte, in: Historische Zeitschrift 162 (1940), pp. 231-257.

Raphael, Lutz: Ordnungsmuster der ‚Hochmoderne'? Die Theorie der Moderne und die Geschichte der europäischen Gesellschaften im 20. Jahrhundert, in: Schneider, Ute/Raphael, Lutz (Ed.): Dimensionen der Moderne. Festschrift für Christof Dipper, Frankfurt/Main 2008, pp. 73-91.

Reichherzer, Frank: 'Alles ist Front!'. Wehrwissenschaften und die Bellifizierung der Gesellschaft vom Ersten Weltkrieg bis in den Kalten Krieg, Paderboren 2012.

Schmitthenner, Paul: Die Wehrkunde und ihr Lehrgebäude, in: Volk im Werden 1 (1933), pp. 34-36.

Scott, James C.: Seeing Like a State. How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed, New Haven 1998.

Seidt, Hans-Ulrich: Berlin, Kabul, Moskau. Oskar Ritter von Niedermayer und Deutschlands Geopolitik, München 2002.

Seidt, Hans-Ulrich: From Palestine to Caucasus. Oskar Niedermayer and Germany's Middle Eastern Strategy in 1918, in: German Studies Review 24 (2001), 1, pp. 1-18.

Soldan, George: Der Mensch und die Schlacht der Zukunft, Oldenburg i. O. 1925.

Szöllösi-Janze, Margit: Wissensgesellschaft in Deutschland. Überlegungen zur Neubestimmung der deutschen Zeitgeschichte über Verwissenschaftlichungsprozesse, in: GG 30 (2004), 2, pp. 277-313.

Gugerli David et al: Nach Feiernabend .Jahrbuch für Wissensgeschichte Nr.7, Zirkulationen, Zürich 2011.

Tomohide, Ito: Militarismus des Zivilen in Japan 1937-1940. Diskurse und ihre Auswirkungen auf politische Entscheidungsprozesse. München 2019.

Weingart, Peter: “Struggle for Existences”. Selection and Retention of a Metaphor, in: Sociology of Sciences 18 (1994), Yearbook Biology as Society, Society as Biology, pp. 127-151.

Wiepking-Jürgensmann, Heinrich Friedrich: Die Landschaftsfibel, Berlin 1942.